

中心市街地活性化の歩み ～「市場」と「城」を生かす～

日本不動産研究所 徳島支所
不動産鑑定士 伊藤 修一郎

昨今、地方経済が疲弊し、財政が悪化し、さらに高齢化と若年層の人口流出は、日本の地方経済を悪化させるばかりであり、日本の地方都市はどこに行っても似たような「まちづくり」でおもしろみに欠けると言われて久しい。

まずは“箱”がないと、というのも分かるが、仏作って魂入れずで、そこに、街やその地域特有の文化を取り入れないことには本当の活性化は実現できないのではないかと。

地元への愛着をどう表現し、アピールしていくか。

そのような視点から、徳島市の市街地活性化への地道な足取りの中に、話題のスポットを探してみた。

【徳島マルシェ】



「徳島マルシェが開催される『しんまちボードウォーク』」

徳島マルシェは、徳島市中心部の川沿いにある“しんまちボードウォーク”で、毎月最終日曜日に開催されている「市場」である。(※マルシェとは、フランス語で「市場」という意味)

いわゆる“産直”に似ているが、

- ・徳島産こだわりの農産物やそれらの加工品を厳選し、
- ・ヨーロッパの朝市のような、お洒落で楽しい雰囲気の中、
- ・生産者が消費者に直接販売を行う

というような特徴を持ち、事務局により出店者が毎回厳選されており、徳島県内最高レベルの「市場」となっている。その結果、平成22(’10)年12月26日の第1回開催以来、1回の平均来場者数は1万2千人を超え、県内はもとより、県外は関西方面などの来客も多く、徳島県内最大の産直市となったと言われる。

これを契機に、徳島マルシェの開催に合わせ、新町川周辺地域では特色あるイベントが展開され、付近のスーパーや百貨店の来客数が増加し、臨時営業を行う店舗も生まれるなど、徳島マルシェは市街地活性化に大いに貢献しており、今後の発展が注目される。

【徳島城跡】

地域ならではの顔として、その地域を代表するものの一つにお城があると言われるが、徳島市にもかつて標高約60メートルの城山に築かれた山城と城山の周囲の平城からなる、連郭式の平山城である徳島城があった。

1585年ごろ、徳島藩祖・蜂須賀家政によって築かれた徳島城は江戸時代の政治の場であったが、明治6(1873)年の廃城令により、城の建物は鷲の門を除いて2年後にすべて解体された。

現在、一帯は徳島中央公園となっており、城山頂上には本丸跡や二の丸の天守閣跡などはなく、城山の麓に石垣や表御殿の庭園を残すのみである。



「徳島城の鷺の門（左）と月見櫓跡石垣（右奥）」

①鷺の門

徳島城の正門として建てられた鷺の門は、徳島城が廃城となった後も残されていたが、昭和20(’45)年の空襲で焼けてしまい、その後、平成元(’89)年に市制100周年を記念して篤志家の寄贈により復元され、現在に至る。

徳島中央公園の南東の角に、東向きに建っており、鷺の門の名は今ではすっかり市民に定着し、毎年5月辺りから、ライトアップされた鷺の門の周りで阿波踊りの練習がなされており、8月の阿波踊りの季節ともなると、この門の前から踊りに繰り出す人も多い。

②月見櫓

鷺の門北側の堀を挟んだ石垣の東南角に建っていた櫓である。2層2階建てで、2階の四方にベランダのように張り出した縁側があるのが特徴。「着見櫓」とも呼ばれ、鷺の門の往來を監視する役割も担ったとされる。明治8(1875)年に解体され、現在は石垣が残っている。

鷺の門と合わせ歴史を感じさせる徳島の名所にしたいと、平成23(’11)年夏に月見櫓の再

建に向けて市民グループが結成され、市民の気運を高めていく活動を展開している。

松山、高知の両市には天守閣を持つ城があり、いずれも名所となっている。徳島でも県民の間に徳島城の再建を望む声は根強い。しかし、文化庁によると、国史跡では、詳細な設計図面や写真がないと、建物の再建は認められないという。徳島城の天守があった二の丸などの写真は現存していないが、明治期に写された月見櫓の写真が徳島城博物館に保存されており、これに着目した。

再建が実現すれば、鷲の門と月見櫓が並ぶ壮麗な景観を再現でき、観光や、市街地活性化の起爆剤になるとの期待もある。